
本当に勇者・・・なのか？

識

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

本当に勇者・・・なのか？

【Nコード】

N6015M

【作者名】

識

【あらすじ】

ひよんなことから異世界に飛ばされてしまった俺！！
でも、お約束のチート能力等はなくて！？
異世界に聞いた途端に魔物に遭遇する俺
あーもう死んだなっと思っただときにそいつは顕れて??？

普通の人間が異世界にやってきて能力もなしに世界を救う（予定）
本当に世界は救えるの？な異世界ファンタジーです

第一話：転移（前書き）

異世界物が多々あったので書きたくなって・・・
後悔も反省もしていない！！な作者です

主人公が死にかけます。しかもやたらと・・・
そんなのが嫌な方は回れ右！
今すぐ戻るボタンで戻ったほうが賢明です
それでもいい方はゆっくりして行ってね！！

第一話：転移

「ここは何処だ？」

きりゆうそうすけ

俺は桐生蒼介、何処にでもいる普通の高校生、18歳・性別は男：

…ふむ、どうやら記憶喪失や錯乱などで、場所が分からなくなっているわけではなさそうだ。

ともすれば、なぜいきなり知らない場所に、ぽつんと立っているのか、考えるか（正直面倒だけど）

今日も退屈な学校生活を終えて、帰宅しようと自転車にのり、帰途へ付いた、あゝ段々思い出してきたぞ、そこで暴走した2トントラックに引かれそうになっただけ……

はいつ回想終了！！ あれ？ てかこれ俺死んでね？ 普通に考えたら、此処死後の世界じゃね？ そっかー死後の世界って密林かあと、そこまで考えて強制的に思考を中断させられる。

ベキベキ！！ バターン！！！！

不快な音と共に、背後の木が突然倒れだした。

振り向くと、そこには明らかに俺に殺意を向けている、禍々しいオラを放っている、黒の騎士甲冑を着た男が立っていた……

あれ？ 俺死ぬんじゃない？ てか死んでんのにまた死ぬの？

第一話：転移（後書き）

後書き地獄いいわけじごく

いかがでしたでしょうか？少しでも楽しんでいただけたら光栄です

突発的に書いてるから文章になってません。ゴメンなさい

R15は血を見るので（主人公が）一応つけたただけです深い意味は有りません（現段階では）今回は死に目に合っても血は見てません
次話では主人公も落ち着いてる頃だと思いたい・・・

ええそうですよ！願望ですよ！！

すいません調子こきましたちょっと吊ってきます

こんな作者ですが今しばらくお付き合いしていただけるとありがたいです

それではまた次話でお会いしましょう

作者でした！！See youノ

第二話：死闘・開始

これはまずい、素人の俺にも解る、焦って動いたら死に、待っても死ぬ、ましてや逃げようと後ろを向けば、まず命はない……

つまりdead or die……うん、どう考えても死ぬな、これ

イヤイヤ、流石にこんな所に飛ばされた原因も解らずに、死ぬのはゴメンだ、せめて理由くらい……

って彼奴消えた!?!?

咄嗟に右に跳ぶ、さつきまで居た場所には、剣を地面に突き刺して
る彼奴と、攻撃で出来たクレーターが眼に入る

「か、かんいつぱっ!?!?!」

突如巻き起こる突風に、体を吹っ飛ばされる、なんとか体制を整え
ようと力を入れるが、勢いは変わることなく俺を押し続ける

「ガッ!?!」

背中を木に叩きつけられようやく止まるが、あまりの衝撃に、肺の
空気を全て吐き出す。

「剣圧だけでこれかよ……」

まずい、正直逃げる算段すら出来ない、圧倒的過ぎる。

ん? そういえば、彼奴なんで? 目を仕掛けてこない、いきなり
斬りかかって来る奴だ、初撃を外したからといって諦めるはずもな
い。

よく目を凝らして彼奴を見る、すると、地面に突き刺さった剣を抜
くのに、手間取っているのが伺えた。

なるほど、力は強いらしいが、頭は回らないのか、とりあえずこん
な開けた場所にいないで、少しでも障害物のある処迄行かないと、
幸い此処は密林、少し移動すれば、障害物なんていくらでもある
少しでも、彼奴の攻撃の威力を減らして、逃げる機会を作らなけれ

ば。

バキツ！ バターン！！

木々を薙ぎ倒す音、走りながら振り向くと、進行上の邪魔なものを、全て己の剣で蹴散らし乍ら、ゆっくりと歩いてくる彼奴の姿、予想通り追ってきている

「ですよー」

最初から予想していたので、そんな言葉しか出てこない、見失ってくれ！ と思いましたが、お約束的に逃げられる筈もないので諦めていた。

彼奴をよく見ると、俺の事は見失ってはいないが、完全に捉えてるわけじゃないようだ、これは好機！

俺は木々の影に隠れながら、奴の後ろに移動し、首筋に途中で拾った木の棒で攻撃する

関節ならあわよくば、昏倒してくれると思ったんだが、失敗のようだ、微動だにしない。

いや、もしかして成功なのか？ 念のため、もう一撃と振りかぶった瞬間、彼奴はこつちを向いた。

そして、その勢いのまま左拳が腹部めがけて襲いかかってくる。

咄嗟に後ろに跳ぶが、間に合わない、腹部に左拳が突き刺さる、そして数メートルの距離を飛ばされる、やはり木に当たったところで止まる。

「かはっ」

今度は空気と共に鮮血が溢れる。

全身が痛い、目が霞む、もう終わったかな……

霞んだ目の端に捉えたのは、ゆっくりと近づいてくる彼奴の姿と、空中に浮いてる女の子の姿

つてまでまで、いくらなんでもおかしいだろ、何で女の子がここにいる。

俺が疑問を口にする前に少女が口を開いた。

「来るのが遅くなってごめんなさい、こっちでもいろいろゴタゴタがあつて」

説明を始めるのはいいんだが今はそれドロコじゃない。

「そんなことは後でいい、それより君が俺を此処に喚んだのか？」

一番の疑問をぶつける。少女はあっさりそれを肯定した。

「あつはい貴方を喚び出したのは私です、蒼介さん」

どうやらようやく俺が待ち望んでいた人物が現れたようだ……

第二話：死闘・開始（後書き）

後書き地獄いいわけじごく

さてこんにちは作者です

最初はこの話で戦闘終わらせる気でした
なぜこうなった

それは私にも分かりません。分かる人がいたら教えてください
戦闘って難しいですね力量不足丸出しです
そんな駄文ですが、少しでも楽しんでいただけたら嬉しいです

ではまた次回！！作者でした。See you

第三話：死闘・決着（前書き）

蒼介「まさか、これを見てくださってる人がいるとはな……」

識「全くですね、正直私が一番吃驚してるのですよ」

蒼介「それなのに、こんなに更新しないという体たらく、しかも、もう一本連載始めたよな？」

識「そうなんですよ、しかもそっちの方が、文字数多いという……あれ？」

蒼介「後でゆっくり話がある……今は取り敢えずこの状況を何とかしてくれ」

識「そのために書くんだよ、まあ死なない程度に頑張ってもらっただけだね　というわけで本編スタート！」

蒼介「えっ？　俺これ以上やばい橋渡るの？」

識「いいから本編に戻りなさい」

第三話：死闘・決着

俺を呼び出した人物は、俺の質問に答えてから、周囲を見回す

「あやう、いきなり大ピンチですねえ、詳しい話は抜きにして、貴方専用の武器と防具をお渡しします、取り敢えずそれで何とかして下さい」

「何でもいいから、早くしてくれ！！ これ以上攻撃を食らったら死んじゃう！！」

そう言いながら、木々を利用して距離を取る、こんな状況で攻撃されたら一溜まりもない

「はい、では目を瞑って、想像してください、貴方の相棒となる武器と防具を」

正直胡散臭いが、今はそれに頼るしか手はない、言われたとおりに目を瞑り、想像する、俺の一番使えそうな武器と、俺の身を守ってくれる、防具を……

明確に、想像した途端、手に何かに触れる感覚がある、それを確かめるために目を開ける。そこには、イメージしたとおり、小太刀が出てきていた。普通の小太刀ではないが……

「ガンブレードとは、またマニアックな…… しかも普通のガンブレードじゃないですし」

「うつさい、ところで、聞くのを忘れてたが、どんな形状でも強度とかに問題はないよな？」

「それはもちろん、どんな無茶をしても壊れないようにはなってますよ、でも、あまり乱暴に扱わないでくださいね」

《悠長に話してる場合じゃないです！ 来ますよ！！》

小太刀に言われて、ふたたび距離をとる

「武器が喋った、AI搭載ですか。マスターとして認められるの、大変ですよ？」

「それは覚悟の上さ、”クリス”マスターとして認める、とは言わない。だから
今だけ力を貸してくれ」

《クリス…それは、私の名前ですか？》

「そのつもりだけど、お気に召さなかったかな？」

《いえ、嬉しいですよ、それと、力を貸して、なんて言わなくて良いです。貴方はもう、私のマスターなんですから》

「い、いきなりマスター認証、従順な娘で良かったですねえ」

「本当にな、早速だけどクリス、クリスはどんな戦い方が出来る？」

《どんなって、何でも出来ますよ？》

「にしても、得意不得意あるだろ？」

《えと、マスターが得意な事は得意で、不得意な事は不得意です》

「そうくるか、じゃあ切れ味とか、弾の威力とかは？」

その問いには、俺を呼び出した奴が答える。

「その娘は、斬ろうと念えば、何でも斬れて、貫こうと念えば、何でも貫けます。つまり、貴方の心象力次第ってやつです」

「心象力か、つまり、俺がクリスを振るった後の事を、明確に思い描けば、その通りの攻撃が出来る、そういう事でFA？」

「FAってというのは、何だか解りませんが、そこ以外はあってます、心象力って単語で良くそこまで解りましたね」

「ヒントは沢山貰ったからな、寧ろ解って当然だろう」

《戦闘中って事忘れてません？ 敵、目の前に居ますよ？》

クリスに言われて、会話を中断、居合の構えをとる

《ま、まさか、迎撃するつもりですか？ 今のマスターなら、まず間違いなく返り討ちですよ？》

「大丈夫、居合だけは少し自信があるんだ」

言って、彼奴からの振り下ろし攻撃に合わせて、ゆっくり、確実に

当たるように抜刀する、キーン！ という澄んだ音がして、彼奴の剣が真つ二つになる

「あやや？ 貴方は戦闘系の特技は皆無だった気がするんですが…」

「そりゃ、我流なら、特技なんて言えないだろっ！！」

続けざまに甲冑の心臓部分にクリスを突き刺す、そしてそのまま、2・3発プチ込む、弾は全部拡散弾、普通なら身体の内部から破壊されて無事では済まない、そう普通なら……

「えーと、甲冑の中が空洞って事は、い、生きてる？」

それを裏付けするように、折れた剣で、攻撃モーションに入る、もう回避は間に合わない

《マスター、爆発！！》

クリスに言われたとおり、爆発を想像して銃を撃つ、途端、起きた爆発に吹き飛ばされる

「グッ！ 肋骨が折れてるっていうのに無茶させるな？ クリス」

《ごめんなさい、でも死ぬよりはマシかと思って》

「確かにな、サンキユ、クリス」

「いきなり、死なれちゃっても困るんですけどね」

「それをお前が言うか？ いきなりこんなところに呼び出しやがって、

もうちょっとどうにかならなかったのか？」

「ふ、普段はモンスターも少ない場所なのでしょ？ 時々、あの『ローラン』が出るくらいなのですが、今日は丁度アタリの日のようですね、どんだけ運が悪いんですか」

「運が悪いっていうか、嫌な予感はずず当たってただけなんだから嫌な予感が当たるって嫌な特技ですね、でも納得できちゃうのが不思議です」

「これだけで納得されても困るかな」

「いえつ、貴方のことはいろいろ調べました、貴方の一言で友人のPC壊れたり、貴方が起こって欲しくないことを言うと、その通りになったりするらしいですね」

「何だ知ってたか、そんなところが当たっても嬉しくないんだけどな」

《あの〜まだ終わってないのに悠長に話してていいんですか？》

「動けないから問題ない！！」

「それは、問題だらけです！！ でも、その割に元気そうですね」

「内蔵傷ついてないから喋る分には問題ないさ、痛いのが我慢すればな、まあ彼奴の事は次で決めるさ」

《動けないのに次で決めるって、何か策でもあるんですか？》

「策っていうか、ただの攻撃だよ、見たところ彼奴はこっちの攻撃を避けない、だから、必殺の一撃を放つだけさ」

《必殺の一撃って、普通の攻撃じゃ倒せませんよ？》

「普通じゃなければ問題ないってことだろ？ 頭を一発で消し飛ばせば流石に終わりだろ」

「まあ、その通りなんですけど、でも、出来ますか？」

「まあ見てるって、クリス、力を貸してくれるな？」

《もちろんです！！》

クリスを構え、狙いを定める、今できる最高の攻撃を当てるために

……

「メガ粒子砲！！ てー！」

引き金を引いた瞬間、眩い光を放つビームが放たれる、そしてその光は彼奴、ローランの頭を包みこみ、頭ごと、消滅した

「な？何とかなったろ？」

「頭ごと消滅、でも、あんな攻撃今の貴方の魔力量じゃ不可能なはず……」

《その事なんですけど、マスターの魔力量、ほとんど変わってないです》

「嘘！？そんなはずない、あんな高威力の攻撃して魔力量が変わらないなんて馬鹿げた事有り得ない！」

《でも、事実ですから、多分ですけど、マスターは魔法の存在を知りません、だから、さっきの攻撃は魔法ではなく、心象力のみ、つまり消耗したのは、精神力だけではないかと》

「それこそ有り得ないよ！普通の学生には出来るはずない、もしそうだとすると、今ので精神が壊れてる！」

「あゝ白熱してるとこ悪いが、精神とかの話なら俺は普通じゃないぞ？」

「どういふ事です？」

「小さい頃は、酔った父親に母親が殺されかけたり、凶器が飛んできたり、家が燃えたり、殺されかけたりしたからな、そんな環境にいれば嫌でも精神力が身につくさ」

「ま、また壮絶な過去をサラッと…でも、これで納得しました」

「そのせいで、人間不信になったけどな、まあ、そのおかげで、今こうやって生きてるんだ、悪いことばかりじゃないさ」

「逆に今まで良く生きてましたね」

「その辺は気にしたら負けだな」

『「うちですー」』

その声とともに大量の足音が聞こえる

「これで、助かった…かな？」

なぜ、助かったと思ったのかは自分でも解らない、だけどその時、俺は安心して意識を手放した

（サイド？）

今、私は市民からの要請により、一個師団を率いてロレンスの森まで来ていた、通常、たとえ市民を護る為とはいえ一個師団を動かすことはない、だが、相手がローランなら話は別だ、ローランに追いかけてられているという少年が街に入ったりしたら、街が壊滅してもおかしくない、早く討伐しなくては、私たちはその想いを胸に、ローランを発見した少女に案内されて、進軍していたが、その途中、光が唐突に私たちの視界を遮った

「何だ今のは！！」

「隊長！！ ローランの魔力反応消えました！」

魔力反応が消えたということは、その場から居なくなっただか、死んだということである、ローランは瞬間移動などは使えないので、死んだということになるが、ローランはこと防御面に関してはSSランクでさえ凌ぐ怪物だ、そう簡単に倒せるものではない、その事実を知る兵士たちに動揺が広がる

「皆慌てるな、まずは事実確認を行う！！ 先程の光の出現点まで

「急ぐぞ!!」

兵士たちは動揺しながらも、指示通りに動く、さして時間もかからずに原因も特定できそうだ

「隊長、こちらに少年が倒れています!!」

「解った、直ぐに行く」

「そ、それと、そこにローランの残骸が……」

「なんだと!?!」

やはり、ローランは死んでいたのか、だが、私が目にしたのはどう見ても素人にしか見えない少年と、見慣れない武器だった

「貴方が見たのは、この少年で間違いはないか?」

「は、はい、間違い有りません」

「ふむ、怪我をしているようだ、衛生兵! 彼に手当を」

「了解!!」

さて、少年には、聞くことが山ほどあるな、取り敢えず、話は少年が目覚めますのを、待つしかないか……

第三話：死闘・決着（後書き）

後書き地獄いいわけじごく

蒼介「それはもういい」

識「結構気に入ってるんですけど……」

蒼介「どうでもいいよ、そんなの、で？ 設定だと、悲しいことに俺には何も能力がないよな？」

識「チートじゃない勇者ですからね、当然有りません」

蒼介「その辺どうするつもりだ？ ご都合主義にビーム兵器使ってるが」

識「使った本人が言いますか？ まあちゃんと辻褄合わせは考えてありますから」

蒼介「ということは、あれは、俺の能力ではないと？」

識「大分類だと、能力になっちゃいますかね、他作品的な能力ではないですけど、詳しいことはまた次回ということで」

蒼介「また放置なんてしないだろうな？」

識「努力はしますよ？」

蒼介「と言ってもう一本の方に力をいれるというパターンだろ？」

識「何も言い返せません、りよ、両方頑張るといこととで、また次
回…… See you……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6015m/>

本当に勇者・・・なのか？

2011年10月7日15時59分発行